

論文

## 韓戊淑文学の出発点 The Starting point of the Literature of Han Moo-Sook

日本語小説『灯を持つ女』を通して  
Through a Study of “Woman Holding a Lamp” in Japanese

山田 佳子<sup>1</sup>  
YAMADA Yoshiko

### 1 はじめに

韓戊淑(1918-1993)は1948年に『역사는 흐른다』が『国際新報』の懸賞小説に当選したのち活発な創作活動を展開したことから、これまで『역사는 흐른다』が登壇作とされる一方、解放前の1942年、『新時代』社が募集した懸賞小説に応募して当選した『등불 드는 여인』を登壇作とする論評も見られた。しかし後者の場合、ただ当選の事実を述べるにとどまり、作品の内容には触れられていないばかりか、作品の存在さえも確認されていなかった。それは作品が公に発表されず、韓戊淑が解放後の随筆において記した『등불 드는 여인』というタイトルと、その当選以外に何も知ることができなかったからである。

その『등불 드는 여인』は2000年になって影印本が作られ、それが『灯を持つ女』というタイトルの日本語小説であったことが明らかになった。しかしその後も日本語小説であること<sup>2</sup>、影印本が自筆原稿419枚(400字詰)を印刷、製本したものであって解読が難しいこと<sup>3</sup>などの理由により、作品内容の紹介、研究には至っていなかった。

そのような状況の中、韓戊淑は1947年に朝鮮語で『등잔불 드는 여인』という小説を書き始めていたことも明らかになった。

本稿では『灯を持つ女』の内容を中心に、韓戊淑の創作活動の原点について探る。

### 2 『灯を持つ女』の執筆から発表に至る経緯

『新時代』は朝鮮文人協会の後援の下、1942年11月号と12月号において「長篇小説懸賞募集」の記事を掲載し<sup>4</sup>、1943年12月号において1等から3等までを発表している。それによれば『灯を持つ女』は2等であった。当初、『新時代』は当選作、および佳作でも優れた作品は誌上に掲載するとしていたが、当選作が掲載された形跡はない<sup>5</sup>。

結局、活字化されなかった『灯を持つ女』は2000年に福岡の権歌書房によって印刷、製本された。韓戊淑は『新時代』社から原稿を持ち帰り、自宅にずっと保管したまま1993年に他界した。それが遺品整理の過程で発見され、夫である金振興氏が旧友の紹介で権歌書房に話をもちかけたという。当時から現在までを知る権歌書房の社長によれば、金振興氏からは原稿のコピーを預かったが、長年にわたって放置されていた原稿は下の数枚が湿気で判読不可能の状態となっており、作品の結末部分は初めから持ち込まれなかったという。そのため製本された作品は未完となっている。また、

中表紙に「昭和18年4月20日 3稿<sup>6</sup>」と記載されていることから、韓戊淑は『新時代』1942年12月号に掲載された募集記事にしたがって応募したと見られる<sup>7</sup>。そして20～30冊作られた本はすべて金振興氏に渡されたという。

### 3 『灯を持つ女』の展開

『新時代』は懸賞小説の「応募規定」において、枚数については「四百枚乃至、四百八十枚まで。十回乃至十二回に分けて、一回ごとに内容にヤマを設けてほしい<sup>8</sup>」としている。『灯を持つ女』は400枚を超えており、規定の枚数に達している。また、全体は第一回から第十回までに分かれ、それぞれが少なくても39枚、最も多くても45枚の分量である。最後の第十回は36枚である。したがって第十回で完結すると見た場合、欠落は5、6枚以内と推定される<sup>9</sup>。また、それぞれの回はさらに10枚程度ずつ、通し番号には混乱が見られるものの4つに区切られ（第十回のみ5つ）、連載が意識された形になっている。

作品は1920年代<sup>10</sup>、N村の富豪、金家（きんけ<sup>11</sup>）の次男、昌鉉（しょうげん）の婚礼の場面から始まる。嫁に迎えるのは、先代どうしが15年前に約束を交わしていた徐家の英姫（えいき）である。しかし徐家はすでに没落しており、英姫は初めから歓迎されない。寡婦であり、金家の最年長者である姑は嫁いびりの典型を見せ、また、専門学校に通う夫は「寡婦で半娼婦<sup>12</sup>」である下宿の主人の娘婉曲（えんぎよく）と恋仲になり、ソウルに家を構える。結局、結婚後3年で一人娘の慶恵（よしえ）を連れて追い出されるように家を出た英姫は針仕事の女中として他人の家に入るが、娘の将来を案じた英姫は慶恵を父親の下へ送ることを決心する。そして自らは自殺を図る。この自殺は近所に住む外国人宣教師に助けられるという形で未遂に終わるが<sup>13</sup>、英姫はここでいったん姿を消す。

数年が経過し、女学生となった慶恵には、腹違いの妹慶子（よしこ）がいる。また、慶子の友人に光子（みつこ）がおり、その兄、光浩（みつひろ）は画家である。光浩は大晦日の晩、灯火を手にした慶恵の姿にインスピレーションを得<sup>14</sup>、その記憶をもとに制作した「灯を持つ女」という画題の絵画を朝鮮美術展覧会に出品して特選となる。このあと作品はその絵を一つの媒介として、若者たち、そして自立する女性として生まれ変わった英姫の物語を展開していく。英姫は「梨枝」を名乗り、美容師として「瑠美美粧院」を率いる傍ら、茶房「瑠美」も経営している。ただし、それが英姫であることを誰も知らない。最終回に設定された慶恵の結婚式において、新婦の化粧係を買って出た英姫は成熟した娘と対面することになるが、自ら母親として名乗り出ることはない。

そしてこの未完の作品は、「私の結婚式のお支度をして下さった方です」と、慶恵が新郎に「梨枝」を紹介する場面で終わっている。

### 4 『新時代』の要求とそれへの対応

『新時代』は内容に関しても、以下のように定めている。

平明にして、健全明朗なるもの。取材は現代物でも、歴史物でもよい。いづれにしても、戦時下国民の生活力に機械油の如き愉悦を注いでくれる小説であつてほしい<sup>15</sup>。

……国文によつて一般大衆の文学的な要求に答へ、よくその嗜好を高め、以て民衆を啓蒙指導することの出来るやうな作品は、ほとんど絶無と言つても過言ではないやうです……一般大衆の国文

による文学的な要求に応ずることこそ、半島文化の現段階に於てはもつとも必要な事業の一つではないだらうかと思はれるのであります……<sup>16</sup>

「平明」、「健全明朗」、「戦時下」、「愉悦」、「国文」、「文学的要求」、「一般大衆」、「嗜好」、「啓蒙指導」等がキーワードになっているようである。以下、これらのキーワードを念頭に、登場人物たちの性格や行動について見ていく。

まず、金家について見てみると、作品の冒頭に置かれた婚姻と婚礼に関する描写に示されているように、朝鮮の伝統を頑なに守る両班家である。その家に嫁入りした、没落した両班家の娘、英姫が家を出ることになるまでの過程、すなわち婚礼の当日に姑が愛用してきた鏡が割れるという「不吉な前兆<sup>17</sup>」、偶発的な崖崩れによる金家の長男の死と巫女による「場祓い<sup>18</sup>」、およびその後の巫女信仰、下女も絡んだ「呪い人形<sup>19</sup>」の発見、そしていわゆる姑による極端なまでの「嫁いびり」の数々や、昌鉉の後妻、婉曲が慶恵に対して見せる滑稽なまでの「継子いじめ」は、あたかも旧小説のような展開である。韓戊淑自身も旧式の結婚による苦労が並大抵ではなく<sup>20</sup>、金家における英姫の待遇は実体験がモチーフになっていると見る事が可能である。しかし仮にそうだととしても、描写にはかなりの脚色を加え、物語性を醸し出そうとしたものと思われる。これに関して徐正子は、「旧小説の陳腐な話の登場は近代女性小説史において意外かつ新たな(?)主題だ」とし、それは韓戊淑が「嫁暮らしや旧女性の生き方を極度に問題視していた」ことを示すものだとして述べている<sup>21</sup>。

次に、慶恵の従兄、慶宰（けいさい）とその妻、美沙子について取り上げる。慶宰の父、すなわち慶恵の伯父に当たる金家の長男は英姫の嫁入り直後に偶発的な事故で死亡している。この出来事も英姫が罪を着せられ、家を追い出されることになった理由の一つであるが、幼い頃の慶恵は英姫によく懐き、慶恵を実の妹のように可愛がった。その後、日本で医学を学んだ慶宰は都会に背を向け、故郷のN村で医院を開き、貧しい人々は無料で診療する。また、村の老人や子供たちに衛生教育をして伝染病の予防に努め、民間療法や迷信の排除にも力を尽くす。

その慶宰を慶恵とともに支えるのが日本人妻の美沙子であり、作品に登場する唯一の日本人である。美沙子は慶恵の仕立てた韓服を着て、巧みな朝鮮語を話す。慶宰の祖母（英姫の姑）は初め、美沙子を嫁に迎えることを頑なに反対したが、孫息子の誕生が祖母の心を変えさせた。そして重病を患ってからは美沙子の献身的な看病を受け、誰よりも大きな信頼を寄せるようになる。この美沙子は良妻賢母の典型として描かれており、慶宰の論文通過に際し、「内助のお蔭<sup>22</sup>」と称えられる。しかし祖母の死に際して「哭」をしながら、そのような風習に対して明確な違和感を表現するところは注目される<sup>23</sup>。

英姫の娘である慶恵は「灯を持つ女」のイメージが示すように、朝鮮の伝統を受け継ぎながらも、一方では慶宰の医院の建物を古い朝鮮家屋から現代風に改造するようなセンスの持ち主であり、家事や裁縫にも工夫を凝らす。性格も良く、あらゆる面で肯定的な人物として描かれている。その腹違いの妹慶子と、友人の光子は女学校を卒業するやいなやパーマをかけに美容院を訪れるような「モダンガール」である。とくに光子の兄、光浩に好意を寄せる慶子は天真爛漫で向こう見ずな性格であり、義姉の慶恵に対してはライバル意識を露わにする。

最後に、慶恵の結婚相手となる承観（しょうかん）の人物像について見る。承観は慶宰と中学の同級で、裕福な家で育った。しかし大学に入ると、「危険思想<sup>24</sup>」に陥り、上海へ渡った。慶宰はその後の消息を知らなかったが、思いがけずも故郷で再会する。承観は2年間の服役を経て転向した後、父の遺した土地に農場を作り、そこに前科者や浮浪者を集めて更生事業を始めていた。作品

では慶宰と承観の再会が1940年の年末に設定されており、前後の時代背景について推察することができる。

承観は「志満（しま）」という氏を作り、農場の全員を志満家に入籍させる<sup>25</sup>。そして「今まで兄弟のつもりでいたんだが、氏を同じうしてもつとその感を深くしたよ<sup>26</sup>」と感想を話し、祝賀会を開く。それは「大国旗」の掲揚に始まり、「宮城遥拝」、「君が代」斉唱と続く。このような承観に「一人の聖者の姿<sup>27</sup>」を見た慶恵は感動し、二人は結ばれることになる。

『新時代』の「懸賞長篇小説選後評」は『灯を持つ女』について、語彙の豊富さ、登場人物の無駄のない扱い方などを評価する一方、欠点を二つ挙げている。一つは「事件の滑り出しが如何にも晦渋」であること、すなわち作品の冒頭において、婚礼を控えた金家の台所の慌ただしい様子を映し出すとともに、下女たちによって新婦の家の事情が噂され、英姫の行く末を暗示する場面を指していると思われる。

もう一つは「主人公承観の司法保護事業が、あまりに大寫しにされ過ぎたために、作品の焦点がぐらついた」ことである。承観を主人公と捉えているところが注目される。評者はそれに続けて、「これは、この問題だけを独立させて扱った方が、遙かに効果があつたと思ふ<sup>28</sup>」と述べており、欠点として挙げながらも、むしろ承観をめぐるストーリーが『灯を持つ女』を当選に導いたと見ることができる評価である。朝鮮では1936年12月、思想犯の更生を徹底することを主たる目的として「朝鮮思想犯保護観察令」が施行された<sup>29</sup>。承観の事業は私財を投じて行っているため「司法保護」ではないと思われるが、作品には「農場の噂を聞いた西大門署の司法主任が遙々農場を訪れて彼の手がけた刑余者達を承観の手に託した<sup>30</sup>」という下りがある。実際にそのようなことが行なわれていたのかもしれない。

以上に見たように『灯を持つ女』には『新時代』が掲げたキーワード、すなわち「平明」、「健全明朗」、「戦時下」、「愉悦」、「国文」、「文学的要求」、「一般大衆」、「嗜好」、「啓蒙指導」が随所に散りばめられている。何より「平明」で喜怒哀楽に満ちたストーリーは「戦時下」の生活に「愉悦」を与え、「一般大衆」の「文学的要求」と「嗜好」を満たすことに寄与するであろう。また、前世代の陰謀劇と対照をなす若者たちの純粋な恋愛劇は「健全明朗」そのものであり、全ての人物の生が明るい未来を約束されているかのように肯定的に捉えられている。そして慶宰と美沙子に見られる迷信打破や衛生教育は「啓蒙指導」と言えるであろう。さらに加えて、慶宰と美沙子の「内鮮結婚」、承観の「創氏」や「保護事業」は「皇民化政策」をそのまま反映したものである。

## 5 韓戊淑と日本語、都市文化

韓戊淑は1918年にソウルで生まれた。翌年、道庁に勤める父の転勤に伴い釜山に移り、そこで成長した。普通学校を経て1931年、父の強い希望により日本人学校である釜山公立高等女学校を受験し、34名の朝鮮人の中で唯一人合格した<sup>31</sup>。父が日本人学校にこだわった理由には、「日本を知ることが日本に対抗する第一歩であること<sup>32</sup>」、「朝鮮人の学校より2年間多く学べること<sup>33</sup>」などがあったようである。

釜山公立高等女学校は1932年4月時点で学級数20、教職員数35名、生徒数926名であり<sup>34</sup>、比較的大規模な学校だったと見られる。当然のことながら級友は日本人ばかりであったが、差別されることはなく、日本語にも何一つ不自由しなかったという<sup>35</sup>。また、小図書館と言えるほど、家には「高度の知識人」であった父の蔵書がたくさんあり、肺の病気で学校を休みがちだった女学校時代は乱読と耽読の生活だったという<sup>36</sup>。そうして蓄積された文学の素養が、自ずと小説の執筆を促し

たのではないかと考えられる。

『灯を持つ女』は言葉に関するかぎり、「平明」とはほど遠い。『新時代』は「応募規定」において、「用語」については「国民学校を卒業した程度の半島人の国語力ででも読めるやうな、いはば、そんな平易な国語で書いてほしい<sup>37)</sup>」としているが、文字が達筆であることは別として、語彙の豊富さという点においては、日本語の慣用表現<sup>38)</sup>、諺<sup>39)</sup>、特定の集団で用いられた言葉遣い<sup>40)</sup>、ことば遊び的な表現<sup>41)</sup>などが駆使されている。この作品が当時、発表されていたとしたら、果たして「国民学校を卒業した程度の半島人の国語力で」理解できたかどうかは疑問である。

また、日本語に翻訳できない朝鮮語の語彙については漢字を示し、例えば「問安」には「ムンアン」とルビを付したうえで、「御機嫌伺い」という意味を括弧付けしている<sup>42)</sup>。また、「良家」には「ヤンバン<sup>43)</sup>」、「漬物時」には「キムジャン<sup>44)</sup>」とルビが付されている。こうした例は枚挙に暇がなく、語彙のみを対象にした研究が別途、必要と思われるほどである。

一方、『灯を持つ女』には当時の京城という植民都市の文化に関する事柄も数多く書き込まれている。例えば、「化粧」や「庇髪」、「パーマ」、「腕時計」、「オペラバッグ」といった女性のファッション、また、映画や演劇「カチューシャ<sup>45)</sup>」の上演、デパート、動物園などの娯楽関連、そして「ドーナツ」や「クッキー」といった新しい食文化のほか、当時歌われていた「荒城の月」、「鳩ボッポ」、「天然の美」、「露営の歌」、「月と母」、「野ばら」、「ドリゴのセレナーデ」などの歌も登場する。さらに、物語の展開の発端となる絵画「灯を持つ女」が特選となった「朝鮮美術展覧会<sup>46)</sup>」(鮮展)や、北原白秋の詩「落葉松」の朗読など、韓戊淑の教養や嗜好と関連する事柄も挙げることができる<sup>47)</sup>。

このような都市文化は、「新女性」がその担い手として大きな役割を果たしていた。作品ではそうした女性たちの諸様相が登場人物の個性によって明確に表現されていることも注目される<sup>48)</sup>。新しい世代に当たる慶恵と慶子、光子をはじめ、婉曲、そして再生した英姫もまた「新女性」であるが、各々が違った描かれ方をしている。すなわち女学校卒業を前後した慶子と光子は化粧や髪型など、流行を追い、恋愛にも積極的な面が強調して描かれ、妓生あがりの母を持つ婉曲は自らの境遇を恨むことを止め、自分らしく生きていくことを決心する。そして下宿生であった英姫の夫を「カチューシャ」の鑑賞に誘い、自らの境遇を涙ながらに打ち明けて同情を買い、身体をあずける。一方、慶恵と美沙子は伝統を尊重しつつ新しい生活様式も身に付け、教養の感じられる女性として描かれている。そして慶恵に対する母性を自ら放棄し、自殺未遂と西洋人男性との紆余曲折を経た英姫は自立した職業婦人として蘇るのである。

韓戊淑がタイトルの「女」に「ひと」とルビを振っていることについて、申允珠は「登場人物としての男性の立場、男性たちについての説明を故意に削除した作家の意図<sup>49)</sup>」が感じられるとしながら、女性を一人の人間として、その生き様を多角的な側面から捉えようとした<sup>50)</sup>と解釈しているが、韓戊淑がそのような意識を持ち、そのような女性人物を描き得たのは、恵まれた家庭で成長し、植民地下の公務員であった父、ソウル出身であることを自負する母の下で都市の近代文化に触れる機会が多かったであろう家庭環境<sup>51)</sup>と日本人学校での生活によるところが大きいと考えられる。

## 6 「등잔불 드는 여인」の中断から見えるもの

韓戊淑は解放後の1947年から1948年にかけて、『등잔불 드는 여인』を発表した<sup>52)</sup>。それは『灯を持つ女』の前半部分とはほぼ同じ内容であるものの、『灯を持つ女』の3分の1ほどの分量であり、連載第五回で唐突に終了している。その理由として、掲載誌である『새살림』の休刊が考えられる

が、詳しくはわからない<sup>53</sup>。

『새살림』は1946年9月に米軍政の下に創設された婦女局の機関誌であり、男女平等と女性の政治参与を促進することを目的としていた。そのため女性読者を意識して純ハングルの比重を高くするとともに、文芸面に多くの誌面を割き、読者からも小説、随筆、詩、漫画等の原稿を募集した。多くの女性読者から投稿が寄せられたようである<sup>54</sup>。当時、韓戊淑は未公表の『灯を持つ女』を書いたに過ぎなかったため、『새살림』がどのような経緯で韓戊淑に原稿を依頼したのか不明である。あるいはその間、何らかの小品を書いて発表していた可能性もある<sup>55</sup>。

『등잔불 드는 여인』の連載に際し、韓戊淑は二つの大きな改編を行った。その一つは承観が登場する第五回では時代設定を解放後とし、彼を「前科者<sup>56</sup>」ではなく、上海で活動していた「祖国光復の功労者<sup>57</sup>」としたことである。しかし作品は第五回で中断され、その後の展開は知る由もない。ことによると承観の農場をめぐるストーリーは『灯を持つ女』の重要な要素であるだけに、韓戊淑は先を書きあぐねて中断に至ったのかもしれない。

もう一つの改編は慶宰の妻を日本人ではなく、日本で育った朝鮮人女性としたことである。しかし当時、幼い頃から日本で暮らしたとすればその多くは労働者階級の子であり、名家出身の医学生との結婚は考えにくい。韓戊淑は日本人の美沙子を朝鮮人女性に置き換えるにあたり細部にわたって微調整を行ってはいるものの、現実味に欠けるばかりでなく、ストーリー上で果たす役割が曖昧になってしまった。

女性を「ひと」として捉えようとした『灯を持つ女』を土台にした『등잔불 드는 여인』は、「女性の声は女性の口で<sup>58</sup>」という『새살림』の発刊意図に大枠においては応え得る作品であったが、中断の理由が何であれ、日本の植民地期に日本語と都市の近代文化に囲まれた環境の中から生まれた作品を、建国前の動揺する社会に落とし込むには様々な制約や困難があったものと推察される。

## 7 おわりに

韓戊淑にとっての執筆は日本語と日本文化に囲まれた環境でスタートした。『灯を持つ女』は総督府が推し進めた朝鮮の「近代化」の産物や、天皇制を含め、日本の政策や伝統的思想が数多く描かれ、また、言語面においても日本語特有の語彙や表現が駆使されている。『灯を持つ女』はストーリー性に優れ、韓戊淑の作家としての資質を窺わせる作品である。しかし解放後に朝鮮語による創作を始めるにあたっては新たな素材、新たな表現方式を獲得する必要があったはずである。韓戊淑は『등잔불 드는 여인』の中断後、事実上の登壇作とされる『역사는 흐른다』を書き、作家としての地位を固めた。今後、解放後に書かれた作品を詳細に検討することにより、『灯を持つ女』に始まった韓戊淑の執筆の変遷が見えてくるものと思われる。

本稿は朝鮮学会第70回大会（2019.10.6）における口答発表の原稿のうち、第5章の一部を修正・加筆したものである。

---

### 注

1 新潟県立大学国際地域学部

2 徐正子は、「韓国文学史ではハングルで書かれた作品のみを韓国文学の範疇に入れる」としている（「韓戊淑の文

- 学精神の始まり、初期小説研究』『女性文学研究』第45号、2018.12、p.405、注8）。
- 3 イ・ホギュは、韓戊淑の夫から『灯を持つ女』を見せられ、それが日本語小説であることがわかったときの衝撃を述べている（イ・ホギュ『蓮の花が美しい訳』（『韓戊淑の文学世界』、セミ、2000、pp.34-35）。また、申允珠の「時代を横断する個別の女性たち」（『日語日文学』第80輯、2018.11）は初めて『灯を持つ女』の内容に踏み込んだ論文であると見られるが、その中でも解読の困難さが吐露されている。
  - 4 『新時代』1942年11月号では「長編小説懸賞募集 予告」として締切を「昭和十八年二月末日（予定）」、発表を「本誌四月号誌上（予定）」としたうえで、「其他詳細は本誌十二月号に発表の予定」としている。同12月号では「予告」が消えるとともに、締切が「昭和十八年四月末日」、発表が「本誌六月号誌上（予定）」と変更されている。さらに「其他詳細は本誌新年号に発表の予定」となっているが、その後の同誌に募集記事は見当たらず、1943年12月号に「懸賞長編小説選後評」として、3つの作品と順位が発表されている。なお、『新時代』からの引用文における漢字は現代の書体に改めた。以下も同様である。
  - 5 韓戊淑は単に「当選」と記し、順位については述べていないが、『新時代』は1等から3等までを「当選」として扱い、「佳作」と区別したものとと思われる。
  - 6 中表紙には韓戊淑の当時の住所（夫の社宅）が記載されていることから、応募時に本人が表紙として付けたものと思われる。「3稿」はおそらく応募までの本人による修正を意味するものと思われる。
  - 7 注4参照。
  - 8 「長編小説懸賞募集」『新時代』1942.12。
  - 9 金振興氏は影印本『灯を持つ女』の末尾に、「残念なことに本書の原稿が二、三枚と思われますが四二〇頁以降が失なわれています」と記している。
  - 10 「大正も十年をすぎると」（韓戊淑『灯を持つ女』、樺歌書房、2000、p.10）という下りから推定される。
  - 11 登場人物の名前には日本語読みのルビが振られている。以下、名前の読みを括弧内に示す。
  - 12 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.21。
  - 13 英姫は宣教師として滞っていたこの外国人医師と一時、同棲していたことが最終回で明かされる。
  - 14 ソウルの歳時風俗として、大晦日の晩に部屋、庭、台所、戸、便所など、家中の所々に火を灯して夜を明かす「守歳」がある。雑鬼の出入を防ぐためとされる（任東権『韓国歳時風俗研究』、集文堂、1993、p.214）。
  - 15 「長編小説懸賞募集」、前掲。
  - 16 同上。
  - 17 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.9。
  - 18 同上、p.33。
  - 19 同上、p.38。
  - 20 韓戊淑自身、名前も顔も知らない相手と結婚し、礼節を重んじる旧家の嫁として自由のない生活を送ったことを「火種」（韓戊淑『私の心に浮かんだ月』、乙酉文学社、1992、p.58）などにおいて記している。
  - 21 徐正子、前掲論文、p.413。
  - 22 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.408。
  - 23 美沙子は「かういう事も今度だけだ。私の代からは改めるようにしてみせる」と内心で誓う（韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.119）。
  - 24 同上、p.101。
  - 25 金家も「金井」姓を使用しているが、創氏改名に関する下りはない。
  - 26 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.197。
  - 27 同上、p.208。
  - 28 以上3つの引用、寺田瑛「懸賞長編小説選後評」『新時代』1943.12、pp.112-113。
  - 29 『保護観察制度の概要』、京城保護観察所、昭和十四年、『植民地社会事業関連資料集〔朝鮮編〕36』、近現代資料刊行会、2000、p.107-112。
  - 30 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.229。
  - 31 韓戊淑「火種」、前掲、p.20。
  - 32 韓戊淑『この寂しい出会いの祝福』、韓国文学社、1981、p.81。なお、同校の「本科」の科目は、1912年時点で修身、国語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、教育、手芸、英語、韓国語、体操があり、このうち、教育、手芸、英語、韓国語は「随意科」とされていた（『釜山要覧』、釜山商工会議所、大正元年、『韓国地理風俗誌叢書』、景仁文化社、1995、pp.112-113）。
  - 33 韓戊淑「火種」、前掲、p.21。同校は1925年に修業年数が4年から5年に延長されている（『釜山公立高等女学校資料』巻1、[釜山公立高等女学校]、[昭和10]、p.93）。
  - 34 『釜山府勢要覧』、釜山府、昭和七年（『韓国地理風俗誌叢書』、前掲、p.356）。
  - 35 韓戊淑『この寂しい出会いの祝福』、前掲、p.81。
  - 36 同上、pp.90-91。
  - 37 「長編小説懸賞募集」、前掲。
  - 38 「洪皮が剥ける」、「浮身を糞す」、「金の草鞋で探す」など。

韓戊淑文学の出発点  
日本語小説『灯を持つ女』を通して

- 39 「江戸の仇を長崎で討つ」、「飼犬に手を噛まれる」など。
- 40 いわゆる「ざまます言葉」、「てよだわ言葉」(中村桃子『ジェンダーで学ぶ言語学』、世界思想社、2010、p.31参照)など。
- 41 「見る花を菊(聞く)の花とはこれいかに」など。
- 42 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.10。
- 43 同上、p.16。
- 44 同上、p.316。
- 45 日本では1914年、トルストイの「復活」を島村抱月が脚色した新劇「カチューシャ」が初演され、主演の松井須磨子が唄う「カチューシャの唄」が大ヒットした。その後、朝鮮でも東京留学生らによる劇団が上演し、話題となった。
- 46 1922年に朝鮮総督府による「文化政治」の下に創設され、「芸術上の日鮮融和を図る」という目的から朝鮮人からの出品を促した。『新時代』の表紙画、挿絵、漫画のほとんどは朝鮮人画家によるものだという(金恵信『韓国近代美術研究』、ブリュッケ、2005、pp.67-68、180)。
- 47 韓戊淑は女学校時代、絵画の実力を認められて特別に指導を受け、金末峰の『密林』の挿画を書くなどしていたが、結婚を急ぐ両親を説得することができずに画家への夢を諦めたという(韓戊淑「火種」、前掲、pp.21-23)。
- 48 「新女性」とは元来、近代的な西欧教育を受け、社会の啓蒙の先頭に立つ先覚者を指す呼称であったが、1920年代に街路を闊歩する女学生に批判の目が向けられるようになると、いわゆる「モダンガール」のイメージとも重なり合いながら、その意味が多様化した(徐智瑛著、姜信子ほか訳『京城のモダンガール 消費・労働・女性から見た植民地近代』第3章「近代の前方に立った女性たち」、みすず書房、2016参照)。『灯を持つ女』の中では、婉曲が「新女性」と表現されている。
- 49 申允珠、前掲論文、p.170。
- 50 同上、p.169。
- 51 カン・ナンギョン「韓戊淑研究」『韓戊淑文学研究』、乙酉文学社、1996、p.178-179参照。
- 52 イム・ミジン「解放期の民主主義宣伝と女性解放—家庭雑誌『새살림』を中心に—」(『韓国学研究』第47集、2017.11)がおそらく初めて『등잔불 드는 여인』について言及し、徐正子「韓戊淑の文学精神の始まり、初期小説研究」(前掲)は作品の内容にも踏み込んでいる。
- 53 徐正子、前掲論文、p.406。
- 54 イム・ミジン、前掲論文、pp.357-374。
- 55 韓戊淑文学館発行の年譜によれば、韓戊淑は『灯を持つ女』の後、朝鮮演劇協会の戯曲募集に応じて2度当選したことになるが、作品は見つかっていない。
- 56 韓戊淑『灯を持つ女』、前掲、p.159。
- 57 韓戊淑「등잔불 드는 여인」、『새살림』1948.7.8、p.74。
- 58 イム・ミジン、前掲論文、p.370。